『民俗誌』論・試行と展望
—高桑ゼミ民俗論集 I —

本当に民俗誌に可能性はあるのか？

豊 豊

1992年10月
筑波大学 歴史・人類学系 民俗学研究室
本当に民俗誌に可能性はあるのか？

菅 豊

「民俗資料」を考える。あいおいは検証の根元をつめる民俗学者が、いかにして民話の存在を認識し、それを記録し、分析するかが求められている。ここでは、「民俗資料」と「民俗資料」を考える。

本当の民俗誌に可能性はあるのか？
（民謡論文の一部）

その在り方という点から見れば違うものであるが、民謡は日本の文化を反映する一つの手段である。

（民謡論文の一部）

それら民謡によっては、地方の風土や、伝統的な生活態度が示されている。
深く、広く、そして真摯に検討することが必要である。このためには、民法の解釈とその適用においての決定的な手段が必要である。これには、民法解釈のための理論とその実践の二つの面に分かれており、それぞれの問題を深く理解することが必要である。

民法解釈の理論においては、民法の解釈が行われる場面は、民事行為の効力、権利の形成、義務の承認および履行、財産の移転などに及ぶ重要なものである。このため、民法解釈の理論を深く理解することは、民法解釈の実践においても重要である。

一方、民法解釈の実践においては、解釈のための実際の場面を考える必要がある。このためには、民法の解釈を深く理解することが必要である。解釈は、実際の場面で行われるため、その適用は、解釈の理論を理解することによって、より適切なものとなる。

したがって、民法解釈のための理論と実践の二つの側面を理解することは、民法解釈の実践において必要な条件である。